

Dr Rein Part 1 (Dr Rein's Images on Japan and his curriculum vitae

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/17880

ライン博士 その一（ライン博士の日本観と足跡）

楠根 重和

序

外国に住むと、自分の国を意識させられ、日本に興味を持ったと言う人は多いだろう。私も、そのような一人であつた。日本に関する本を読んでいるうちに、徐々にそのようなジャンルの書籍をコレクションすることにも喜びを感じるようになった。特に、日本が西洋とコンタクトを持ち始めて以降、明治期のころまでの、西洋人の書いた、日本に関する記述に興味を持っている。それらを読んでいる過程で、西洋における日本イメーজの枠組みを知るようになった。もちろんそのような日本イメージは、日本発のものもある。外国発のものもある。同時に日本人の、日本に関する記述にも興味を持った。それを下敷きにして、後には、マス・メディアにおける、日本のイメージ研究へと発展させた。そのような研究の過程で、ライン博士 (Johann Justus Rein) に遭遇することになる。最初にこの日本研究者の存在を知ようになったのは、全くの偶然である。ライン博士は、一八七三年から一八七五年という、近代日本の曙の時代に、二年間日本に滞在し、日本を研究した人である。

それは今からもう一五年以上も前になるが、当時、北陸日独協会の事務局で、いろいろと北陸日独関係の催し物を企画していた。そのために、県下からもドイツに関する情報が入ってくる機会が多かった。ある日、白峰村から電話があり、ライン祭りに是非、北陸日独協会からも誰か参加して頂きたいとの依頼があつた。ライン祭り？無恥を曝すようだが、私は最初、ラインという名前を聞いたとき、ライン下りか何か、ドイツの河川と、手取川を引つかけた村起こしの一種かと思つたのである。そのときに思いついたのは岐阜県のライン下りであつた。当

時、ライン博士の存在を全く知らなかったのである。ドイツ人の学者の名前だと言うことで、ともかく、そのライン祭りというものに出席することになった。今では恐竜化石が出たことでもかなり有名になったが、その当時は、まだそれほど脚光を浴びていなかった手取川の桑島化石壁近くに、ライン顕彰碑が建てられていることを知ったのは、そのときが初めてである。

それからいろいろとライン博士のことを調べてみた。この博士が、石川県を訪れた西洋人としては史上二人目であることを知った。最初の西洋人は、余談になるが、アメリカの天文学者でジャパノロジストであり、「NOTO」という紀行文の中で、「穴水の港に舟が入ってゆくと、水路が狭まり運河をいくようだ」と、穴水を紹介したパーシヴァル・ローエル (Percival Lowell) である。ライン祭りのいきさつは次のようである。ライン博士は、後にも詳しく書くが、白山登山の途中で、白峰村に立ち寄り、桑島化石壁の植物化石を持ち帰り、友人の古生物学者にその調査を委ねた。この古生物学者は、それが、ジュラ紀の植物化石であり、幾つか新種の化石も混じっていることを、国際的に名高い古生物学の専門誌に発表した。このような早い時期に、その専門誌の中ではあるが、白峰村の名前が世界に紹介された訳である。そのことを指摘したのは、当時金沢大学の教養部教授で、現金沢大学名誉教授の松尾秀邦である。白峰村の名前をいわば世界に知らせたのは、間接的には、ライン博士の功績だと言うことで、それを顕彰して、白峰村はライン博士の碑を建てたのである。松尾はこの碑文の中で、そのことに触れている。松尾は現在も「手取川流域のけい化木産地調査団」の団長として、桑島化石壁で、動植物の化石調査し、このほど、詳しい報告書を発表している。

ドイツから友人が訪ねてきたとき、このライン博士の碑を見に行ったことがある。そのときは、白峰村の教育委員会の方が、私たちを案内してくれた。それ以来、頭の片隅にライン博士のことがずっとあり、ドイツに立ち寄るついでに、時間が許せば、ライン博士の足跡を訪ね、ドイツ各地を回って調べていくうちに、このライン博

士が、世界第一級の日本研究者であることを知ったのである。ライン博士が最初に教授として赴任したマールブルク大学の地理学教室を訪ね、同大学図書館や、地理学の図書館で彼に関する文献調査をした。次に彼の赴任先であった、ボン大学の地理学教室を訪ね、地理学の担当者に会って話を聞き、ライン博士に関する資料を手に入れたこともある。また、彼が日本で集めた美術工芸品がどこにあるのかを調べる目的で、当時プロイセンに寄付したという情報をもとに、統一前の東ベルリンのケベニツク(Köpenick)にある工芸美術館を訪ねたこともある。そして、統一後、この収蔵物が新しくベルリンに建てられた工芸美術館に移されたという噂を聞いたので、そこでもラインの足跡を捜したが、展示物には見つけることができなかった。それとは全く別に、ユーゲント・シュテイル、ジャポニズム、美術工芸品に関心があったので、ヨーロッパを訪ねる度に、各地の工芸美術博物館や、美術館を見て回った。全く偶然に、ヘッセン州のフランクフルトの工芸博物館で、ライン博士が持ち帰った工芸品を見つけた時は、やっと巡り会えたという感情で一杯になったことを思い出す。

日本では私の知る限り、東京大学の医学部に一冊しかないライン博士の名著『日本』(一八八一年版第一巻)を偶然、一九八八年にコンスタンツ市の市立図書館で見つけ、コピーして持ち帰った。一九九四年に一度ライン博士の『日本』が競売にかかり、それを手に入れたドイツのある古本屋から、一万マルクで買わないかとの電話を頂いたことがあり、かなり気持ち揺れたが、結局は買わなかった。もう二度と、目の前に現れることはないと思われるだけに、今でも手に入れなかったことを後悔している。

一〇年ほど前に、ライン博士の生まれ故郷の郷土資料館には何かライン博士に関する資料が見つかるかも知れないという気持ちから、フランクフルトの郊外のラオンハイム(Raunheim)という町を訪れた。ラオンハイムは、年譜を見れば分かるように、ライン博士にとって少年時代を過ごしたと言うよりも、生まれた町にしか過ぎない。その日はあいにく資料館の休館日であった。入り口は非情にも閉じられたままであった。にもかかわらず、

日本からわざわざ訪ねてきたというので、その職員は、資料館を開けてくれた。石川県の白峰村で、ラインの顕彰碑が建てられたことは、向こうでも知られていた。その郷土資料館に、ライン博士のコーナーがあることを知ったのである。そこで、数は少なかったが、ライン博士が日本から持ち帰った工芸品などを見ることができた。資料館から連絡していただき、ラオンハイム市役所に立ち寄った。その市役所の職員の案内で、ラオンハイム市在住の郷土研究家で、ライン博士の資料を収集している人を紹介してもらった。彼の厚意で、未公刊のライン博士に関する資料をコピーし、持ち帰ることができた。それから、また、一〇年近くの年月が過ぎてしまった。この間に、白峰村は数年前に、ラオンハイム市に職員を派遣したと聞いている。

ラオンハイム市に対しても、白峰村に対しても、また、この貴重な資料をコピーさせてくれた人に対しても、いつかはライン博士について論文を書かなければならないと思いつつ、自分に課せられる新しい課題に取り組まなければならなかったのを言い訳にしながら、年月が徒に過ぎていった。この間、私が集めたライン博士に関する資料のファイルは、毎日、いつになったら、論文を書いてくれるのかと、無言の圧力をかけ続けたのである。遅すぎたという感もあるが、集めた資料を墓場まで持ち続けては申し訳ないので、執筆する決意を固めたのである。日本でもまだほとんど知られていない世界的な日本研究家、ライン博士について、これから、何回かに分けて、紹介していくつもりである。

ライン博士が日本に来たとき、彼はまだ教授職についていなかった。この論文の中では、途中で変えたくないで、彼が教授職についた後も、ライン博士という敬称を一貫して使い続けることにした。当時のドイツ語文献は、正書法が今と異なっているが、現代風に書き改めないで、そのまま古い形を使うことにした。

日本研究家としてのライン博士の位置

アメリカ大陸「発見」と言うのと、まるで、なにかそこに誰もいなかったかのように聞こえる。このような表現を別に気に止めないのは、私たちのものの見方に、欧米中心主義的な見方が刷り込まれているからである。それが誤った認識だとはほとんど意識できないかも知れない。でも、日本はアメリカよりも遅く西洋人に「発見」されたのだと書くとうどうだろう。日本は西洋人に発見される以前に存在していたではないかと反論があるかも知れない。アメリカ大陸にも人が住んでいたのであり、インカ文明や、アステカ文明が存在していたのと同様である。もちろん、中国経由で、中国大陸の東方、海の彼方に、何かしら国があるらしいことは分かっていたという反論があるかも知れない。マルコ・ポーロ (Marco Polo) がいるじゃないかと。マルコ・ポーロの『東方見聞録』でも、ジバングという国について言及していたことは、誰もが知っている通りである。しかし、マルコ・ポーロは日本を実際に訪れた訳でもないし、日本については伝聞をもとに書いており、その記述には推測と想像が混じっている。マルコ・ポーロの豊かで、黄金に満ちあふれたジバングについての記述と、マンデヴィル (Sir John Mandeville) が『東方旅行記』の第二十三章で、シナの大汗が所有する豪華な宮殿が、純金だらけであるとの描写は著しく似ている。この中国に対する描写は、日本に対してと同様、単なるレトリックと考えた方が良いのかも知れない。また、最近では、そもそも、マルコ・ポーロが中国に来たのかどうかも怪しまれている。西洋の社会が産み出した、東洋の幻想と考えた方が良いのではないか。日本は西洋にとって未知のままであったのは確かだ。

コロンブスのアメリカ大陸「発見」は一四九二年。バスコ・ダ・ガマ (Vasco da Gama) が喜望峰を回ったのは一四九八年。宣教師ジョルジュ・アルヴァレス (Jorge Alvarez) が中国大陸に来たのは一五二三年。日本

に初めて三人のポルトガル人が種子島に上陸したのは一五四二年。それまで、日本に上陸した西洋人はいない。最初の西洋人が日本に上陸し、日本を「発見」したのは、確かにアメリカ大陸「発見」より遅いことになる。

日本を実際に見た西洋人による日本の記述が始まったのは、それから以降のことである。バスク人ザビエル (Francisco Xavier) がポルトガルの宣教師として、インドのゴアに着いたのが一五四二年。通訳のアンジローの人物と能力を評価したために、日本行きを決心した。ザビエルが鹿児島に上陸し、日本での宣教を開始したのが一五四九年である。ザビエルは日本から本国への報告書、『ザビエル書簡』を残している。ルイス・フロイス (Luis Frois) は一五六三年に西彼杵の横瀬浦に上陸し、一五九七年長崎で死亡する。彼は三四年間も、日本に滞在し、『日本覚書』、『日本史』、『日本総論』などを書き表した。これら、宣教師の書いた書物に関して言えることは、宗教的情熱から、そして、自己の利益から、日本の宗教や文化を、キリスト教中心的、自己文化中心的な世界観から見ている。日本のことを一見、評価しているときでも、また、日本のことを酷評しているときもそうである。また、彼らの書物からは植民地主義の匂いすらするのである。ザビエルは「植民地政策に資する情報」(吉川七〇―七二頁)を集める情報員だったことが、『ザビエル書簡』から読み取れる。宣教師たちが本国に送った書簡には、『日本占領計画』(吉川一〇八頁)さえあったのだという。明確な日本占領計画としては、ポルトガルのロドリゲス神父に宛てた、ザビエル書簡 (1562) が証明している。ザビエルは其中で日本は好戦的な国だから、軍艦を送っても全滅するだろうから思い止まらせる手紙を送っている(古川一一二―一三三頁)。ザビエルはポルトガルの国王にキリスト教布教の資金を出させるために、日本をキリスト教に帰依させることが、どれほど利益になるかと書き、そして堺が金銀を大量に有していることを指摘している(ザビエル全書簡五一〇頁)。長崎からイエズス会の総会長に宛てたペドロ・デ・ラ・クルスの手紙 (1599.25) の中には、日本をキリスト教の国にするには武力を行使する以外は不可能であり、またそうすることが正当であり、スペインと

ポルトガルが別々に行動を起こして日本の港を占領して、布教と貿易と征服の基地を手に入れることを論じる手紙も見つかっている(古川一〇五頁)。付け加えておかなければならないのは、これら宣教師の書いた日本研究は、主としてラテン語ないしポルトガル語で書かれており、「イベリア半島以外、あるいはローマのカトリック教会本部以外のヨーロッパにはそれほど一般には広まってはいなかった」(クライナー三〇頁)と言うことである。日本というものが、一般に知られるには、もう少し時間を待たなければならなかった。

キリスト教が禁止され鎖国令が敷かれて以降は、西洋人の活動は著しい制限を受けた。長崎の出島という一七〇m×七〇mの小さな島でオランダ人だけが上陸を許され。しかも、そこから対岸に渡ることは例外的にしか認められなかった。ましてや、日本国内を視察することは許されなかった。オランダ商館の長は、寛政二年(一七九〇年)までは、毎年一度、江戸へ参府しなければならなかった。一種の献貢外交である。決められたルートで、監視下のもと、「普通は九〇日内外の」(板沢三八頁)海路や陸路で江戸へ行く途中、日本を見聞するのがせいぜいのところである。このような、不自由なのぞき窓から日本を見るしかなかったので、「オランダ人」(多くのドイツ人もオランダ人と称して滞在していた)の目に映った日本の姿は、虚偽と推測と幻想の産物となる。日本の姿はヨーロッパに正しく伝えられた訳ではない。一六四九年、ベルンハルト・ヴァレニウス(Bernhard Varenius)が、日本についての最初の地理書物(Hohmann In: Anthes 一八頁)、『Descriptio Regni Japoniae』を表しているが、これも、宣教師たちの伝聞に依拠しており、「ステレオ・タイプ」(クライナー二二頁)の書物である。しかし、交易として許されたオランダ商人たちは、実務家であり、宗教家に比べれば日本をもっと客観的に見ている。異教徒である日本人に対するステレオ・タイプは影を潜めるのである。制限はあったものの、それでも出島には江戸年間に、数十万の「オランダ人」が来ているものと、クライナーの書物から推察できる。その中には次に描く三人の学者もいた。

第一の学者は、エンゲルベルト・ケンペル (Engelbert Kämpfer) である。彼はドイツ人の医師でありながら、東インド会社に雇用されて、オランダ人と偽って一六九〇—一六九二年の二年一月間、出島に滞在した。彼は、この間、一六九一年と一六九二年の二度も江戸参府に同行する機会があった。彼は今村源右衛門という信頼できる協力者を得ることで、出島という不自由な島にしながら、多くの資料を集め、持ち帰ることができた。『日本誌』や『廻国奇観』(ラテン語)を書く。後者は博物学と鎖国論を含んだ書物である。江戸時代には、ケンペルのこの二冊の書物は、ヨーロッパ経由で、日本語に翻訳されて里帰りしている。『日本誌』の方は、事情があって、ドイツではなくて最初に出版されたのはイギリスである。一七二七年に英語訳がロンドンで出版された。ドイツでは一七七七年に一卷が、一七七九年に二巻が出版される。この書物は、日本を自国中心主義から見えない。『相手国である日本の文化の中にある独自の理論を探ろうとしていたのだろう』とクライナーは書いている(二六頁)。ケンペルのポジティブな日本像には、ヨーロッパの三〇年戦争の混乱が反映している。日本が鎖国によって、平和を維持していることを高く評価した。そのような、平和な絶対国家を造っている犬公方、綱吉の中に、ケンペルは英明な啓蒙君主を見ていた。『廻国奇観』では綱吉のことを「偉大で卓越した君主」(ポタルト・ベイリー一七頁)と書いている。どのようなヨーロッパと比較するかで、日本像がポジティブになったり、ネガティブにもなったりするのである。初めて客観的に日本を描写する『日本誌』は、それ以降の『日本観を方向づけた』(クライナー四七頁)とされている。

次に来た、学者はスウェーデンの医師で植物学者のツェンペリー (Carl Peter Thunberg) である。彼は一七七五年から一七七六年にかけて一年四ヶ月間、出島に滞在した。ツェンペリーは植物分類で有名なリンネの弟子で、医学と博物学を学び、アフリカとアジアで九年間に及ぶ調査研究を行い「四〇〇の新動物を集め、植物の未知の七五属一五〇〇の新種」(ツェンペリー三七三頁)を集めた。スウェーデンに戻ると、ウプサラ大学の医学

と植物学の教授になり、後には、学長になった。また、ストックホルムの科学アカデミーの総裁にも選ばれた。世界的な学者が出島に来ていたのだ。ツェンペリーの日本と日本人に対する見方は、公平であり、「国民性は賢明にして思慮深く、自由であり、従順にして礼儀正しく、好奇心に富み、勤勉で器用、節約家にして酒は飲まず、清潔好き」（ツェンペリー二一九頁）と書いている。植民地主義で破廉恥なオランダ人に対して、ツェンペリー自身が一步距離を置いている。ツェンペリーは、リンネの二命名法により、ケンペルが集めた植物に、正式な名前を与えた。なぜ、オランダの東インド会社に、オランダ人以外の人が多いのかと言うと、オランダが小国でありながら、当時世界的に展開していて、人手が足りなかったからである。そのために、様々な外国籍を持つ人物が雇用されたのである。

第三の学者は、ケンペルに二三〇年以上も遅れて一八二三年に出島に来た、フィリップ・フランツ・フォン・シーボルト(Philipp Franz von Siebold)である。シーボルトはケンペルの書物を読んで、その内容の正確さに、驚いている。ちなみに、黒船に乗って日本に来たペルー提督も、ケンペルの『日本誌』を携行してきた。シーボルトは『日本』を書いた。シーボルトは、ケンペルに比べると、鳴滝塾を通じて、日本人や、日本人の弟子との接触が多く、国内を自由に歩き回るのは許されないとしても、日本に関する多くの情報を手に入れることができた。日本での滞在期間も一八二三年から一八三〇年と比較的長い。一八二六年には將軍に謁見している。彼は、日本地図を持ち出そうとする国禁を犯し国外追放になる。これがかの有名なシーボルト事件である。しかし、あらかじめ逮捕を予測していたシーボルトは、その地図を書き写し、国外に持ち出した。これによって正確な日本の形がヨーロッパに知られた。日本は鎖国令を廃止し、西洋と通商条約を結んだ。それによって、シーボルトの国外追放も解かれた。彼は再度日本に来ることを許され、一八五九年から一八六二年まで、再び日本に滞在した。シーボルトはクライナーが言うように「遅れてきた百科全書派」的などころがあつて、幅広い事実を羅列してい

る。その中には、日本人の弟子によってまとめられた論文も多く収録されている。この意味でヨーロッパ中心主義は陰をひそめている。その一部は『江戸参府紀行』として平凡社に収録されている。上に述べた三人の学者は、いずれも百科全書的な幅広い知識を持ち、医者として、植物学者として、また、文化人類学者として日本を観察した。とりわけ最後のシーボルトは日本の医学に貢献したところは大きい。

江戸時代の日本イメージが、西洋でどのような変遷を遂げたかは、次のように総括できる。鎖国とキリシタン弾圧によって、外国人は国外追放され、島原の乱が起こる。信仰のために殉死するという悲劇が、ヨーロッパに日本人キリスト教徒受難劇を産みだし、各地で上演される。異教徒でありながら、敬虔なキリスト教徒という日本人像が作られる。カトリックの世界では、日本のイメージはおしなべてポジティブであった。三〇年戦争で疲弊したヨーロッパから来たケンペルも、日本に対してポジティブなイメージを持っていたようである。しかし江戸時代初期に形成されたポジティブな日本像は時代が下ると共に、変化していく。ヨーロッパの政情が落ち着き、産業革命と植民地経営による海外領土の拡大と、その地域を自己の文化に組み入れることによって、相対的にヨーロッパの地位と力が高くなるにつれて、日本の脱神話化が進み、日本のイメージはネガティブなものになっていった。アジアの英明な啓蒙王が専制君主になるのである。モンテスキュー (Montesquieu) は『法の精神』の中で、「アジアでは、隷従の精神が支配しており、それはいまだかつて、そこから離れたことがない。そして、この地方の全歴史において、自由な精神を特徴づけるただ一つのしるしも見いだすことは不可能である」(モンテスキュー四八二頁) とアジア全体を否定している。

東インド艦隊司令官、ペリー提督が浦賀に四隻の軍艦(黒船)を率いて、日本に開港を迫ったのが、一八五三年七月八日である。その次は、翌年の三月三十一日に、七隻の軍艦を率いて、武力的圧力のもと、和親条約を三月三十一日に結んだ。それをきっかけに、日本は次々と諸外国と、通商条約を結ぶことになった。鎖国が終わったの

である。かくして日本は二度目に発見されるのである。

江戸時代においても、すでに日本工芸品の質が高いことは知れ渡っており、ヨーロッパの宮廷社会からは評価されていた。しかし、それは、ごく一部の貴族階級や裕福な商人に知られている程度であった。日本の開港によって、日本の工芸の素晴らしさが、あらためて広範囲に、西洋に知られるようになった。それを見た江戸幕府や藩は、国威発揚と貿易のために、積極的に、万国博覧会に工芸美術品を出品した。万博での日本展示場は好評であり、展示物は飛ぶように買い取られた。それによって、後にはジャポニズムと呼ばれる、一八六〇年前後に端を発する日本ブームが始まる。これが、イギリスでは、アート・アンド・クラフト運動を引き起こし、フランスのアル・ヌボー、ドイツのユーゲント・シュティール、イタリアのアル・デコ、など、工芸、芸術、建築、写真、後には、日本デザインと言うように、様々な芸術分野で影響を与えることになる。なぜ、ライン博士についての記述に、ジャポニズムの話をするのかと言えば、まさしく、このジャポニズムが、ライン博士と日本を結びつけるきっかけを与えたからである。日本美術工芸の質が高く、ヨーロッパで評価されていたので、プロイセン政府は、日本の美術工芸と貿易の調査のために、ライン博士を日本に派遣したのである。調査の目的は、『日本』によれば、完成度の高い、日本の工業と貿易を調査し、報告することであった。ここでは、工芸とは書いていないが、別の書物（Degener 一〇三頁）では、ライン博士はプロイセン政府の委託で、日本の「工業と貿易、とりわけ工芸」の調査をしたとの記述を読むことができる。

種子島に西洋人が到着したのが、第一の日本「発見」なら、江戸末期に、日本が和親条約で、鎖国令を解いて、国内に自由に通行は許されなかったものの、西洋人が日本での居住が許されたのが、日本の第二の「発見」と呼べよう。明治になって、日本の国内を自由に歩けるようになって、これまで知られなかった、東北、北陸、山陰などの地にも、西洋人が訪れることになる。ペリー提督も日本を測量調査した一人である。その他多数の専門家、

例えば、エルジン (Elgin)、リヒトホーフエン (Richtofen)、クニッピンク (Knipping) なども日本を測量調査している。文字通り、日本は発見されたのである。ペリーはこの意味で日本探検隊の隊長なのである。プロイセンも、リヒトホーフエンを探検隊の一員として日本に派遣したのである (Mittheilungen 6 (二七八頁))。リヒトホーフエンは、後にあるように、ボン大学の教授で、ライン博士の前任者にあたる人である。この日本第二の「発見」期の初期に、我がライン博士は一八七三年から二年間にわたって日本に滞在し、学者の目で、日本をつぶさに調査したのである。ライン博士も、日本発見のために、日本に送られた人物の一人であることには変わりがない。

ライン博士はこれまで、西洋人の手によって書かれた書籍の中で、日本に関する最も詳しい二巻の書物『日本』を残している。『日本』は日本について最も信頼に足る書物になった。ケルプ (Kerp) はライン博士記念号で、最良の地理学のモノグラフィであるとして書いている (生誕七〇年二頁)。この書物で、『ラインはケンペルやシーボルトと並ぶ、ドイツ人として三人目の学者となったのである』(死後五〇年七頁)。ライン博士自身、日本に來た外国人の中で、自分が傑出しているとの自負心を持っていたことが窺える。『富士の山と登山』の中には、彼の自負心があらわれている箇所があり、面白い。ライン博士が常に意識していたケンペル、ツェンペリー、シーボルトたちは、江戸参府の旅行中、見張りがつけられて、籠の中から、富士山を見たに過ぎず、日本が開港するまでは、誰一人西洋人で富士山に登った人はいない。鎖国令が解かれてからは、長期に滞在する、外国人商人や外交官が富士に登るようになった。「この最近一八年の間に、富士山は何百人という外国人が登っているが、その内の極わずかな人だけが、そうすることで、知識の増大に寄与している」(富士の山三七〇頁)と書いて、観光主体のこれらの外国人と、学者である自分との違いを書いている。富士山や高山帯に生える、植物の詳しい記述があり、高山帯の植物が大陸のものであることを指摘している(富士の山三七六頁)。また、当時日本に滞

在する「道徳的に良くない」外国人に対して冷ややかな視線を送る。このあたりの感覚は、ツェンペリーの感覚に不思議と似ている。

ツェンペルは、寧ろ日本を肯定的に見たために、内容が翻訳に当たって、改竄されるほどであった。それは、当時の日本の繁栄と、ヨーロッパの混乱という歴史的背景がもたらしたものである。ツェンペリーは学問的情熱から自ら求めて日本に来たのである。シーボルトは、自分の回りに集まる多くの日本人学者に囲まれ、日本についての情報はこれらの友人から得たものであるだけに、日本についての記述は、クライナーの言うように、その視点には、ヨーロッパ中心主義は陰をひそめている。出島の三学者は、いずれも、医学、植物学、動物学と幅広い知識をもって、研究の情熱から日本に渡ってきたのである。江戸の初期、中期、後期と、時代こそ変わっているが、彼らの学者としての透明な記述の故に、後世にまでその価値を失わないものを残し得た。

日本の力が相対的に弱くなり、砲艦外交に屈して、開港し、外国人居留地に来た外国人が強圧的な態度で日本に接していたそんな時代に、ライン博士は日本に来たのである。薩摩戦争、下関戦争など、外国人に危害を加える日本人には腹切りなどの厳罰が下され、法外の賠償金を払わされた時代である。時代的には、一番ヨーロッパ中心主義が強く表れても不思議ではない。この明治の初期に来日したライン博士も地理学者としての良心から、自然、文化に細やかな客観的観察眼を失わなかった人であった。「日本」には学者としての透明感、歴史や文化を相対的に見るという姿勢、日本人に対する愛情が満ちあふれている。このことによって、ライン博士は、前者三人の系譜に連なる地位を得たのである。この系譜は、宣教師たちの書いた日本論・日本人論とも、また商人の書いた日本論・日本人論とも趣を異にするのである。

ライン博士の日本観

プロイセン政府が、ライン博士を日本に送った目的は、『日本』でライン博士が書いている所によれば、「独自でかつ完全性の高いレベルにある産業分野と日本の貿易を調査しかつ報告する」(日本Ⅴ頁)ということである。ヨーロッパで生じたジャポニズムがプロイセン政府をしてライン博士を日本に派遣せしめたことが窺える。ライン博士が日本に来たときはどのような時代だったのか。

一八六八年一月六日に明治になった。その当時ヨーロッパや世界の出来事を知っている日本人は、まだ限られていた。岩倉使節団が二年間に渡る欧米視察に出かけたのが一八七一年。ライン博士が日本に来たのは一八七三年。明治期に入って、五年目の時である。まだ江戸時代から明治にかけての混乱はおさまっていない。榎本武揚が函館戦争に破れたのが一八六九年六月。武士の特権を失い、零落した武士が武士の必要性を訴えて、各地で反乱を起こし、武士の不満を逸らすために征韓論すら囁かれているときに、ライン博士は日本を訪ねたことになる。

明治維新になって、侍階層がいかに零落したかなどは、実際に見てきたから書けるのであろう。当時の政府の混乱ぶり、不要な数の公務員の数、見通しのなさ、「下にいろ」(日本四二六頁)という言葉で、外国人を見下す人が、まだ、明治になっても多くいたなどの記述は面白い。それでいて、かつての南蛮人が、異人さん、そして先生と呼ばれるように、外国人の立場が急速に改善されたこと、日本人の外国人に対する変化を記述している(日本四三七頁)。そのために、日本人は外国人なら優秀とばかり、無能な外国人を、高給で雇っていることも言及している。東京、横浜などでは、帯刀している人がめっきり減っているのに、ライン博士の目撃証言によると、一八七四年に金沢ではまだ公務員が全員帯刀していた(日本四二六頁)と書いており、地方格差というか、

前田藩の意識がまだ強く残っていることを感じさせる。外国人をあまり良く思っておらず、攘夷思想を持つかつての侍たちも多かったので、一八七六年の帯刀禁止まで、帯刀した人がそばに通る度に、外国人は寒気がしたという、外国人にはとても物騒な時代であるとの描写なども面白い。

鉄道はまだ、東京と横浜間、兵庫と大阪間（後に大津まで延長されるのだが）の二区間があるだけで、輸送は江戸時代と同じく、船に頼っていた。陸路の方は、参勤交代もなくなり、さびれ、依然として旧街道だけで、それらは細く、舗装されているところはほとんどない状態である。人の移動は、徒歩か、さもないければ、馬車、人力車、籠と言ったところである（日本四四〇頁、*Woeikof* 一七六頁）。橋も架かっていないところでは、大雨になると何日も待たされる。そんな時代だったのである。

日本は、全くの混乱期にあった。当時の日本を世界の中に位置づけて正當に評価できた人はどれだけいたであろうか。一八七〇年には新聞が登場した（日本四二六頁）のであるが、高価で読者層は限られていた。無知と傲慢、不安と模倣の時代に、日本人がその当時気づかなかったこと、また気づいてもその意味が分からなかったことを、ライン博士は著書の中に書き残してくれたのだ。この意味で『日本』は、当時の歴史的記述として第一級の価値がある。「この国を事実上支配しているのは、非常に強力で無責任な官僚である」（日本四三五頁）という記述や、「ミカドの意志が日本を統治しているのではない」、支配しているのは、幕藩体制をひっくり返した人たちによる寡頭政治体制である」（日本四三五頁）という記述を読むと、日本は、現在までどれだけ変わったのだろうか、心許ない気にさせられる。このような時代に、慧眼な学者が、学者の中立的な立場で、細やかに観察しながら日本各地を歩いて調査し、それを書きとめ後世に残してくれたところに意味がある。

彼は、『日本』の序にもあるように、本州、四国、九州を調査している。それらの記述を見ると、海岸線、地層、鉱物、温泉、地震、山脈、水、気候、気圧、風、降水量、植物、動物、魚類、貝類、昆虫、軟体動物、日本

史、日本語、慣習、風俗、住居、家族、宗教、都市などについて、幅広い知識と、関心の持ち主であることが分かる。いたるところ細かい実地調査を行ったことが窺える。例えば、各地の温泉の成分、温度なども調査している。しかしなんとと言っても、興味が持てるのは、日本史の部分である。まるで当時の日本史が、物語を読んでいるかのように、目の前に展開されるのである。歴史書とはこんなに生き生きしたものかと感心させられた。特に、江戸末期から、明治維新の時期については、その直後に来た外国人だけに、直接、その当時から、日本に滞在した、外国人からの情報も入っているのだろう、非常に詳しい。薩英戦争、下関戦争、伏見の戦いの情報。外国人が日本人に対してどのような姿勢を取っていたか、また、日本人が外国人に対して反感を抱き、襲撃に及んだこと、そのために、日本政府は多額の損害賠償を払わなければならなくなったこと、関係者の処罰、腹切りなどを詳しく書いている。明治の変革期に衰退する町、隆盛する町の移り変わりも教えられる。一八六八年のキリスト教徒の迫害と、少なくとも一二〇人のキリスト教徒が加賀藩に連れてこられたことも、『日本』の中に読むことができる。戊辰戦争、彰義隊が天皇として担ぎ出した輪王寺宮（後の北白川）の教奇な運命と、後に許されて、北白川がドイツへ留学したこと、そして彼が後に、一八七九年に日本地理学会の創設に力を貸し会長になったこと、その宴会の席で素晴らしいドイツ語によるスピーチをしたことなど（日本四一六―四一七頁）も初めて知った。印象深いエピソードである。

ライン博士の日本史には、不平武士の不満を和らげるために、征韓論が沸き起こり、台湾征伐が生じていることや、一八七六年に熊本と長州で反乱が起こったことや、一八七七年には西南戦争が起こったことも読むことができる。西郷隆盛のもとに集まった五万人の侍、そして、三万人の侍の学校創設など、西郷の権力は、知事を上回っているのだと言う（日本四二九頁）。西郷のもとに集まった多くの武士、そして西南戦争、最後に西郷が討ち死になるまでの描写はまるで、戦記物を読むようである。「講演好きで、また同時に聴衆の心を打つ講演者」

であった（Hohmann in: Anthes 一五頁）と言う記述があるが、確かに言葉が巧みである。ライン博士の書く日本史は、日本からの当時の視点だけではなく、ヨーロッパからの視点も入っていて、今日でも読み応えのある内容となっている。

ライン博士の日本を見る目は温かい。当時の日本に対しては、様々な弱点、失敗も寛大に見るという姿勢がそこには貫かれている。日本を見下す態度は現れていない。日本が当時直面したものが何もかも新しいことであり、非常に困難さを伴っているのに、日本に対する評価を寛大に下すべきだとも書いている（日本四三七頁）。また、当時日本に来た西洋人の中には、一山当てようとか、道徳的に宜しくない連中がいることにも言及している（日本四三八頁）。このことから分かるように、西洋人に対しても厳しい視線を忘れない。日本人に気に入れられようと、何でもかんでも日本人の真似をする西洋人や、今度は、日本に対して、一切の譲歩もせずに、日本人を黙らせようとする目的で、粗野な振る舞いをする西洋人や、その中間の道を選び、相手の愛国心をくすぐり、役人を買収して、金儲けしようとする西洋人（日本四三八頁）がいたと書いている。ヨーロッパ人の日本人にたいする無理解を指摘している（日本四一九頁）箇所もある。日本の大名は、小さいときから甘やかされており、病弱で、頭が良くないと言う記述も見られる。しかし同時に、子供の教育に関して、日本は子供にとつての天国であるとして、評価している（日本四九四頁）。日本理解のヨーロッパ的枠組み、ヨーロッパ中心主義などの病理の歴史は長い。そのような、相互不理解の枠組みは、「一六世紀に遡る」（松田頁二頁）のだと言う。ライン博士はこの点に関しては、非常に中立だったと言える。

もちろん日本に対して、辛口の批評もある。日本の教育に関しては、従順性は喚起できても、「インテリゲンツを促進しない」（日本四九八頁）と書いている。これは、今日でもよく聞かれる批判ではないか。また、青年を鍛えるスポーツの授業がないこと、それと、大都市には健全な娯楽がないことを指摘している（日本四九九頁）。

また、日本人の性モラルが非常に低いことも問題にしている。日本の芸者や女郎として働く女性たちは、日本では、そのような職業を営む西洋の女性たちと比べて、ある程度社会的に高いステータスを与えられており、また彼女たちも社会苦から、両親に売られたので、一般的に同情の目で見られているのだが、日本のモラルという点に関しては、レベルは低いと書いている（日本五〇一頁）。

貿易や外交にたずさわった人物、政府や、大学のお抱え外国人と違って、ライン博士の場合、専門の学問の情熱に突き動かされて、日本の国中を歩き回って調査したのである。その一つひとつの訪れた村々、山々の詳しい報告には驚かされる。今日、誰がそのような克明な記述を残しうるかと考えると、確かに希有なところがあることが理解される。ライン博士は先人のこれまでの日本についての記述の誤りを訂正すると共に、これまで、まだ知られていない地方についても、非常に詳しい記述を中立的な学者の目で残している。

白山・白峰村に関する記述

ライン博士の白山登頂の話は、「日本紀行」に詳しい。この中で、様々な日本の産業を調べると共に、個人的に地理学と、自然科学の興味を満たすべく努力している様を伝えている。プロイセン政府から委託された仕事とは別に、学問的情熱から行動しているとの証言である。この目的のために、北陸道を訪れたのだと言う。京都から北陸道に入って福井、大聖寺、山代、小松に行つて、一八七四年七月一日に白山登頂した事を記している。雨にたたられ、一ノ瀬に宿泊を余儀なくされて、ちょうど、頂上にある銅製の釈迦仏像を山から運び降ろして、神道の象徴である丸い鏡と取り替えるために、金沢から来ていた神官や役人たちの一行と同宿したという記述がある。白山でも、廃仏毀釈が行われ、仏教が神道に取って代わられたことの貴重な記録である。白山信仰の歴史の一コマを垣間見せてくれる。

ライン博士の記述で面白いと思つたのは、白山が日本で、二番目に高い山であるという点（日本紀行二一八頁）である。立山よりも、白山の方が高いと人々が信じていると（日本紀行二二〇頁）と書いてある。二番目に高いという記述は、ライン博士の別の記述とは矛盾するのであるが、ここでは、問わない。何か富山と、金沢との心理的競争があつたのか、それとも、実際に正しい山の高さが測量されていなかったのか気になる話ではある。それと、ライン博士自体が、二二〇メートル付近に雷鳥を数多く見たと記述している（日本紀行二一九頁）。現在の白山には雷鳥は絶滅してしまっている。その当時雷鳥が数多く飛び回つていたという記述には、口惜しい思いをする登山家も多いことだろう。

白峰村の桑島は、恐竜化石が発見され、一躍有名になったが、その桑島は化石が出るところとして当時から知られていた。そこに案内されたライン博士は植物の化石を見つけ、友人の古生物学者ガイラー（Dr. H. Geiler）に委ねた。『日本』において、ライン博士は、日本の地学について、日本にはジュラ紀があつた証拠として、友人のガイラーが *Palaeontographica* N. F. IV. 5 で発表した論文『日本のジュラ紀形成層から得た植物化石について』（*Über fossile Pflanzen aus der Juraformation Japans*）を挙げている。この、白峰村で、ライン博士は短い時間に植物の化石を一六種類見つけた（日本三九頁）。その内、一五種類がガイラー博士によって、特定され、その内、二種類はライン博士の名前がつけられている。ガイラーは、このジュラ紀の組成は、東シベリアやアムール地方のそれと同じであることの指摘をした。ガイラーはそのことを古生物学の専門誌にジュラ紀の植物化石として発表した。そのことで、明治の初期に白峰村を世界に「広めた」ということで、一九八〇年三月に白峰村にライン博士顕彰碑が建立されたのである。

それから、金沢に滞在して富山に行く。その足で、同年七月二六日には浅間山にも登っている。北陸道の幾つかの町では、最初の西洋人と言うことで、多くの人が集まり、学校が休みになったほどだと書いている（日本紀

行二一五頁）。また、「人々は至る所で親切で、思いやりがあり、このことに関してはドイツ人は彼らから学ぶことができるだろう」と誉めている。

地理学に関して

ライン博士の著書『日本』や「日本中山道」が示しているように、ラインの日本研究は、宗教、地学、植物学、動物学、考古学、鉱山学、歴史、経済、人類学、文化、風俗、神社、仏閣、民話、伝説、迷信、信仰、測量などが一緒になって、当時の日本を非常に克明に表している。ライン博士の論文を読むと、あたかもライン博士と一緒に当時の、つまり、文明開化初期の日本を歩いているような感じがする。また、先人の仕事に対しても、できるだけの注意を払っていることが窺える。一例を挙げると、ライン博士は、比叡山を登った後で、西洋人として最初に伊吹山に登ろうとして、現地に行ったが、あいにく天候不順で、行けなかった。伊吹山に登ろうとした理由は、シーボルトの弟子の Ito Keiske が植物学的に見て、伊吹山が一番興味深いと言ったからである（中山道一一頁）のだという。この山の植物をどうしても知りたいと思って、翌年、召使いをわざわざ伊吹山に使わせて、植物を取ってこさせた（中山道一一頁）と書いている。細やかな研究態度には感心させられる。江戸時代の終わりから、明治の初期にかけて、一部は、鉄道が開通するも、ほとんどが徒歩という条件で、日本が西洋人にとって自由に通行できるようになってまだ間がないときに、富士山、御嶽山、浅間山、白山にも登頂している。恐るべき行動力である。

ライン博士の記述から、彼は植物、動物、地学に造詣が深いことがわかる。様々な、動植物や、鉱物がラテン語で記載している。このことから当時の地理学というのは、地学、植物学、動物学、民族学など含んだ博物学的色彩の濃い学問だったことが分かる。地理学は、後の時代には産業地理学、宗教地理学などと、様々な細分化さ

れるのであるが、この当時は、まだ百科全書的博物学的知識を要求される最後の時代だったのかも知れない。この意味でもライン博士は江戸の三学者ケンペル、ツェンペリー、シーボルトの系譜に連なるのである。

交通が不自由だった当時の地理学者としては珍しいほどライン博士は多くの国を訪れている。バルト地方、ドイツ、アルプス地方、モロッコ、カナリア諸島、スペイン、ノルウェー、スウェーデン、フィンランド、イギリス、北アメリカ、ロシア領内アジアなど。これは思弁でものを語りたくないと言う、彼の客観主義の表れであろう。学問にどれ程誠実性と客観性を大切にしたかは、ライン博士の書物を開けば分かる。物事に対する旺盛な興味、正確な記述、過去の人々が書いた記述との絶え間ない比較と訂正、誠実性に驚かされる。客観的な実地調査なしで、外国について判断を下すような行為はライン博士とは無縁であった。そのために、ライン博士は自分と同じように世界を見よとばかりに、若い学者にも海外での調査ができるようにと、ライン基金を設立した。ドイツに帰国したライン博士は日本に関する関心と愛情を持ち続けた。彼のもとに日本人学生が集まるようになった。ライン博士は日本の地理学者山崎直方を育てた。また東大理学部、日本地理院とも接触を持ち続けた。ライン博士は日本の地理学に寄与したというよりも、日本の地理学の礎を築いたのである。

ライン博士の年譜と業績

以下の年譜や業績は、主として、『生誕七〇年』、『没後五〇年』、『没後七〇年』、それにホーマン(Hohmann)伝記とベック(Beck)の業績リストにもとづきながら、その他のデータを付き合わせて、矛盾するところは訂正し、ないし削除し、加筆したものである。以下の年譜と業績は完璧だと言うつもりはない。少なくとも、上記の文献のデータは全て網羅している。まだ他に様々な雑誌に発表したものも参照した。

一八三五年一月二七日にヘッセン州のラオンハイム (Raunheim) で生まれる。父親は、子供が産まれると直ぐに、ギーセン近くのマインツラー (Mainzler) で農地を相続。マインツラーでは小学校と、実科中高等学校に通う。

一八五四―一八五六年、ギーセン (Gießen) 大学で、数学と体系的な植物学と化学を含む自然科学を学ぶ。彼の教師にはリービッヒ (Justus von Liebig) がいた。家庭の事情で、学業を中断。教員養成ゼミに入る。

一八五六―一八五八年、フランクフルトの私学校で教師をする。

一八五八―一八六〇年、当時ロシアのエストニアのレーバル (Reval) の騎士と僧院学校 (ギムナジウム) の教員に招聘され、数学と理科を担当する。この二年間の滞在中に、バルト海沿岸とフィンランドを旅行する。この間、一八五九年にドルバト (Dorpat) 大学で、数学と理科の上級教員の試験を受け、合格する。イギリスに旅行したときに、キュー (Kew) の英国博物館と王室植物園で研究する。この地で、バーミュータ (Bermuda) 諸島の総督と知り合いになる。

一八六一年、ロストック (Rostock) 大学で、「エストニアの気候、土壌、植物相」で博士号を取る。これがライン博士の最初の論文。バーミュータ諸島の総督の息子たちの教育担当に応募し、他の候補者に先駆けて、数学の試験を受けさせられ、その内容が良かったので、他の二人の競争相手は採用試験を受けることなく退けられたという (生誕七〇年記念二三頁)。世界を見たいという、ライン博士の希望はかくして叶えられた。

一八六一―一八六三年、バーミュータ諸島。この教育の傍ら、バーミュータ諸島の地理と植物を研究する。そして、アメリカとカナダを旅行して、一八六三年にドイツに帰国した。フランクフルトに戻って数学と理科の高等職業学校の教員になる。一八七二年まで。フランクフルトにあるゼンケンベルク自然研究協会 (Senckenbergische Naturforschenden Gesellschaft) で活動し、この博物館の蔵書を読んで第二の研究を始める。

一八六八年―一八七〇年、ゼンケンベルク自然研究協会という重要な協会の会長に就任。

一八六八年、第二の作品、『絹生産の現在の状況』(Der gegenwärtige Stand des Seidenbaues)を書く。

一八七〇年、『バーミュータ諸島の物理地理の寄稿』(Beiträge zur physikalischen Geographie der Bermuda-Inseln)。

一八七二年と一八九二年、スペインに旅行。ライン博士は、日本に次いで、スペインにも力を注いだ。フィシャ―(Theobald Fischer)はライン博士のことを、最初のスペイン通の一人と呼んでいる。

『日本からの手紙』(Briefe aus Japan: J. Ber. Frankfurt. Ver. Geogr. Statistik 37 1872: 38 1874)。

一八七三年、『バーミュータ諸島の植物相について』(Über die Vegetationsverhältnisse der Bermuda-Inseln)
一八七三年にも、ゼンケンベルク自然研究協会会長。

一八七三―一八七五年、プロイセンの商務省から、日本調査旅行の委託を受ける。往路ではエジプトに立ち寄る。日本では、本来の仕事以外に、地理や自然科学の研究を行う。日本滞在中から、地理学の専門誌(Petermanns Geographische Mittheilungen)に寄稿した。二年間の滞在後、カナダとアメリカに立ち寄る。

一八七四年『日本における自然科学研究旅行』(Naturwissenschaftliche Reisetudien in Japan: Mittheilungen der Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasien 1 1874. 6六〇―六七一頁; 1875. 7一一―七一九頁)。
一八七五年『ライン博士、自ら登山した白山についてのスケッチ』(Dr. J. Rein gibt eine Skizze des von ihm bestiegenen Hakusan (Referat): Lotus. Prag 25 1875 ― 〇九―一〇頁)。

『日本における幾つかの哺乳動物の分布についてのメモ』(Notiz über die Verbreitung einiger Säugethiere auf Nippon: Zoologischer Garten 16. 1875 五五―五八頁)。

『日本紀行』(Reise in Nippon 1874: Mittheilungen Perthesmann 21 1875)。

ドイツに戻る。帰国後商務省で役人になる道と、キール大学かマールブルク大学で教授職につく道とがあったが、ライン博士はマールブルク大学の職に就く決心をする。

一八七六年「大山椒魚についての寄稿」(Beitrag zur Kenntniss des Riesensalamanders (*Cryptobranchus japonicus*): Zoologischer Garten 17 1876 1111—1127頁) (Roretz, Albrecht von の共著)。

「東京から京都への旅」(Reise von Tokio nach Kioto in Japan (Vortragsref.): Verhandlungen Gesellschaft für Erdkunde Berlin 3 1876 51—52頁、60—66頁)。

日本の気候についての発表。

一八七六—一八八三年、マールブルク大学新設の地理学の初代ポスト助教授(生誕七〇年記念では教授と書かれている)に就いた。マールブルク時代は日本研究に費やした。日本から持ち帰った資料を研究するのに一二年間費やしたと言われている(生誕七〇年記念四頁)。

一八七七年「山繭の養殖と重要性」(Zuft und Bedeutung der Antherea (*Bombyx*) Yama-Mai in Japan: Sitzungsberichte der Gesellschaft. Beförderung gesamten Naturwissenschaft Marburg 1877 60—68頁)。

「日本の海岸の連続的隆起について」(Über die saculare Hebung der japanischen Küste: Sitzungsberichte der Gesellschaft für Beförderung der gesamten Naturwissenschaft Marburg 1877 155—160頁)。

「太平洋の北部における海流とその沿岸地方の気候と植物相に及ぼす影響」(Die Strömungen im nördlichen Theile des Stilen Oceans und ihre Einflüsse auf Klima und Vegetation der benachbarten Küsten. Vortrag: Berichte Senckenbergischen naturforschenden Gesellschaft 1876/1877 101—110頁)。

「日本の食物」(Japanische Gewächse)

一八七八年 「東アジアにおけるたばことトウモロコシの歴史と分布」(Zur Geschichte und Verbreitung des Tabaks und Mais in Ost-Asien : Mittheilungen Perthes 24 1878 一一五—一二七頁)。

一八七九年 「朝鮮人參と樟腦」(Ginseng und Kampfer : Sitzungsberichte der Gesellschaft Beförderung d. Gesanten Naturwiss. Marburg 1879 一四—二四頁)。

「富士の山と登山」(Der Fuji-no-yama und seine Besteigung : Petermanns Mittheilungen 25 1879 二六五—二七六頁)(富士の山)。

「一八七五—七八年間の日本における高地測定」(Höhenbestimmungen in Japan während der Jahre 1875—78, Eine geographisch-geologische Studie : Petermanns Mittheilungen 25 1879 一九二—一九七頁)。

「米とトウモロコシ」(Reis und Mais, Vortrag gehalten am 20. Dezember 1876, Geographisches Institut A VIII Pflanzengeographie)。これは「地理と統計組合」(das Verein für Geographie und Statistik in Frankfurt a. Main 1875—78)の報告書に記載されている。この講演の中で「日本の米の栽培と、入念な栽培方法について触れている。大阪での水田の観察の話し。日本人と米の関係がいかに密接かを、米の名前が変化することとで証明している。苗、稲、粳、粳米、玄米、米、飯、御膳、おまんま(少し発音は間違っているが)また、米の収穫期の違いによっても、早稲、中稲、晩稲と区別されること、また、種類によって、陸稲、粳、餅米の区別があることにも、言及している。また食べる時期でも、朝御膳、昼御膳、夕御膳の区別がある(八一頁)。トウモロコシに関しては、この言葉が暗示するように、ポルトガル人がもたらした(八八頁)。

一八八〇年「日本の地理学雑誌の地理」(Die Geographie in Japan. Zeitschrift wissenschaftlicher Geographie 1 1880 一二九—一三〇頁)。

「日本の中山道」(Der Nakasendo in Japan, Dr. A. Petermann's Mittheilungen, Gotha : Justus Perthes 1880

一三八頁)。

この中で、ライン博士が、「一八六八年と一八六九年の維新で、この国の何百という所と同じく、当地においても、みそもくそも一緒にして、芸術と古い文化遺産に興味のある人なら、関心を持って見つめるであろううななものも破壊している」(一四頁)という記述がある。御嶽山にも登っており、植物に関する知識は、門外漢には、ただ感心する他ない。材木、和紙、木材の加工品、動物についての詳しい記述もなされる。この論文の最後には、クニッピングの中山道についての道路測定表付録が付いている。クニッピングはAzimuth-Compassを使って測量したことがわかる。「幾つかの旅館から聞こえてくる三味線の音楽、芸者の鼻歌(歌い手兼踊り子)が、氷、氷と叫ぶ、氷売りの叫びと按摩の笛の音が、夜のとばりが降りてから、深夜まで混じって聞こえる」(三四頁)と、描写するとき、私たち日本人に懐かしい昔の風景を呼び起こす。それは、地理学者の記述ではなくて、一人の愛情深い、プロの旅人の記述である。高崎から、東京までは郵便馬車に乗って行く。馬が、一二時間ないし二三時間かかるこの区間で、七度も馬を交換したと言っていることを数えている。どんな些細なものまでも細やかに観察していることが窺える。一木一草にも、観察眼が注がれていると言っても過言ではない。

「日本地理」(Die Geographie in Japan, Zeitschrift wissenschaftliche Geographie 1 1880 一二九—一二〇頁)

一八八〇—一八九一年まで存在した雑誌『科学地理誌』Zeitschrift für wissenschaftliche Geographie の共同編集者。

一八八一年 「日本全図」(Dai Nippon Zenzu, eine neue Karte Japans; Osterr. Monatschrift Orient 7 1881 二〇二—二〇三頁)

「日本人の服装と肉体涵養」(Die Kleidung und Körperpflege der Japaner: Österreichische Monatschrift. Ori-

ent 71881 一六四—一六八頁)

「ミカドの国の自然と国民について」(Über Natur und Volk des Mikadoreiches: Ausland 54 1881 一〇—頁)
「ダルンの珊瑚礁理論」(Darnische Korallenriff-Theorie) を批判的立場で Berlin で講演する。

「珊瑚島形成について」(Über den Bau der Koralleninseln. Verhandlungen des 1. Deutschen Geographentages, 1881 二九—四六頁)

スペインとカナリア諸島へ旅行。

ハレの地質学者フリッチ (Karl v. Fritsch) とモロッコへの調査旅行。

ライン博士は、若い学者に海外の研究を助成する協会を設立する。若手の研究者を外国に派遣する目的で、リュッペル (Ruppel) 基金をハレ (Halle) 大学の地理学教授と商工会議所のグロガオ (Glogau) 書記とともに募る (生誕七〇年三頁)。

『日本』の第一巻『ミカドの国の自然と国民』(Natur und Volk des Mikadoreiches) が発行される。第二巻は一八八六年に発行される。英語の翻訳は、第一巻が一八八四年、第二巻が一八八九年。ライン博士は日本の漆芸産業を詳しく紹介した最初の人間である (生誕七〇年四頁)。

一八八二年 「日本の美術工芸」(Das japanische Kunstgewerbe, Österr. Mo. Schr. Or. 20 1882 一—七頁、二〇

—二三頁、五二—五八頁、六八—七〇頁、八八—九三頁、一〇〇—一〇六頁)。

一八八三年 中国の研究者である地理学教室初代のリヒトホーフェン (Ferdinand von Richtofen) 教授の後継者として、ボン (Bonn) 大学の地理学の教授に就任する。以後二七年間、一九一〇年までボン大学の地理学で教鞭を取った。リヒトホーフェンはライン博士よりも三年も早く日本を旅行しているという記述があるが、誤りであろう。一九六〇年の Mittheilungen 第六巻には、リヒトホーフェンが書いた「リヒトホーフェン男爵

の日本と太平洋北方諸島の旅行」(Freiherrn von Richthofen's Reise nach Japan und den nördlichen Inselgruppen des Grossen Oceans) という論文が紹介されている。後者は先に書いたように、プロトヤンの日本探検の一行に加わっていた。

一八八五年 「日本の様々な果実に ついて」(Über verschieden Obstsorten Japans: Österreichische Monatsschrift Or.11 1885 - 106 - 108頁)。

一八八六年 「日本の美術工藝写真図」(Bilderwerke über Erzeugnisse des japanischen Kunstgewerbes: Österr. Mo.schr. Or.12 1886 - 141 - 144頁)。

「金属産業」(Metall-Industrie: Österr. Mo.schr. Or.12 1886 - 101 - 105頁、111頁 - 113頁)

「ライン教授 鋳造の花瓶を紹介する」(Prof. Rein legte photographische Abbildungen gusseisener Vasen vor: Verhandlungen naturhistorischen Vereins, Sitzungsberichte 5 F.3=43 1886 - 161 - 162頁)

『旅行と研究で知る日本』(Japan nach Reisen und Studien, Leipzig)。「日本」の第1巻。

一八八八年 ロンドン王立地理学会(Royal Geographical Society of London)の名譽会員となる。

「日本金属産業」(Japanische Metall-Industrie: Mitt.Mährischen Gewerbenus. Brunn.6 1888 - 111 - 113頁、71889 - 151 - 152頁、171 - 175頁)

「日本の統計について」(Zur japanischen Statistik: Zeitschrift wissenschaftliche Geographie 6 1888 八八頁)

ライン基金が、弟子たちによって設立された。これは若い研究者を外国に送り出すための基金である。

シカゴ博覧会の審査員となる。

一八八九年 「一八五四年以降の日本の文化発展について」(Über die Kulturentwicklung Japans seit 1854: Zeitschrift Missionskunde Religionswissenschaft 4 1889 - 191 - 110頁)。

- 一八九〇年 「フィンランド」 (Finnland, in Alfred Kirchhoffs, Unser Wissen von der Erde“)
- 「台湾のディフツ地理」 (Diephzsische Geographie von Taiwan (Formaosa). Vortrag : Sitzung. Bericht. Niederrhein 1900 A111 – A1111頁)。
- 『地球に関する知識』 Unser Wissen von der Erde (Hrsg. von Alfred Kirchhoff) の本にも採録してゐる。
- 一八九二年 『スペインの自然と特産物』 (Natur und hervorragende Erzeugnisse Spaniens : In der Sammlung : Geographische und naturwissenschaftliche Abhandlungen I, Zur 400-jährigen Feier der Entdeckung Amerikas Columbus und seine 4 Reisen nach dem Westen, Leipzig, Engelmann)。
- 一八九三年 「日本漆栽培の試み」 (Anbauversuche mit dem japanischen Lackbaum : Verh. Naturhist. Vereins, Sitz.ber.5.F.10 = 50 1893 115 – 117頁)。
- 一八九四年 『アジア』 (Asien, in dem Seobelschen Handbuch zum Andreeschen Altasse, 4. Aufl. 1902)
- 「最近一〇年間の日本美術工芸の発展と変遷」 (Fortentwicklung und Wandlungen des japanischen Kunstgewerbes während der letzten zwanzig Jahre : Österr. Mo.schr.Or.20 1894 九七 – 101頁、21 1895 11 – 111頁、111 – 119頁)。
- 一八九六年 「日本列島本土、釜石の陸と海底地震」 (Erd- und Seebeben von Kamaishi an der Nordostküste der japanischen Insel Hondo : Verhandlungen Gesellschaft deutscher Naturforscher und Ärzte/Naturwissenschaft Abt.68 1896 114 – 114頁)。
- 「一八九六年六月一五日の日本の陸と海底の巨大地震」 (Das grosse Erd- und Seebeben in Japan am 15. Juni 1896 (Referat) : Jahrbuch Astronomie 7 1896 156 – 158頁)。
- 一八九七年 「一八九六年六月一五日の釜石海底地震」 (Das Seebeben von Kamaishi am 15. Juni 1896 : Peter-

manns Mittheilungen 43 1897 三(四一三頁)。

ロシアの將軍で、叔父のライン (von Rein) とロシヤ旅行をする。

一八九九年 「スペイン・シエラ・ネバダについて」 (Beiträge zur Kenntnis der spanischen Sierra Nevada, Wien, Lechner: Aus: Abhandlung d. K.K. Geographischen Gesellschaft in Wien I 一八八二—二二二頁 2 Kt)。

一九〇〇年、六五歳になつてゐた彼は、新設のケルンの商業学校 (Warenkunde und Handelsgeographie) の教職にも就く。

『レ・プラタ地方の征服と居住の歴史と、馬と子供を持ち込み、この地を生活した荒廃について』(Erläuterung zur Geschichte der Eroberung und Besiedlung der La Plata-Länder sowie der Einführung von Pferden und Kindern und deren Verwilderung, Leipzig)。

一九〇五年 「日本第二版」 (Rein, J.J.: Japan nach Reisen und Studien im Auftrage der königlich-preussischen Regierung dargestellt. Erster Band: Natur und Volk des Mikadoreiches. Zweite, neu bearb. Aufl. Leipzig, Wilhelm Egelmann 1905) 一、二五年になつた日本研究の盛衰。

『ライン博士生誕七〇年記念』 (Festschrift zur Feier des 70. Geburtstages von Johann Justus Rein. Zugleich 1. Veröffentlichung der Geographischen Vereinigung zu Bonn, Bonn, Rohrscheid & Ebbecke 1905)。

一九〇七年 「ライン・褐炭から見つゝた巨大・イースギについて」 (Über eine riesige Sumpfzypresse aus der rheinischen Braunkohle: Aus: Mitt. d. Deutschen Dendrol. Gesellschaft 16)。

一九〇九年 『アジア』 (Asien: In: Scobel, Geographisches Handbuch II 1909/10)。

一九一〇年 ボン大学を退職。

一九一八年一月二三日ライン教授はボンにて八三歳で死亡、ボン郊外のケセニッヒ (Kessenich) の墓地に葬られる。墓碑には家族の意志で、称号など一切ない。ライン博士の後継者であるフィリップソン (Alfred Philippson) は「飾らず、忠実で、たくましく、それでいて真実、正直で、公平、それでいて、好意と人間愛と真の宗教性に満ち満ちている。それが彼の人生と学問の特性」と書いている。(Hohmann in Anthes 11〇四頁)。

参考及び引用文献

- Anthes, Alfred (Hrsg.) : Johannes Justus Rein, Ein Raunheimer erforschte Japan, Schriften des Heimatvereins Raunheim, Nr. 1 1982. この論文にはボン大学に Hohmann, Joseph : Johannes Justus Rein, Leben und Werk eines bedeutenden Geographen という、ライン博士についての伝記と、ボン大学でライン教授没後六〇周年記念論集として一九七八年に発表された Beck, Hanno : Johannes Justus Reins Stellung in der Würdigung zu seiner 60. Todestag am 23.1.1978 が収録されている。後者はライン教授の業績に関するものである。
- Beck, Hanno : Johannes Justus Reins Stellung in der Würdigung zu seiner 60. Todestag am 23.1.1978 (没後六〇年)
- Behm, E. (Hrsg.) : Dr. A. Petermann's Mittheilungen aus Justus Perthes' Geographischer Anstalt. Gotha, Justus Perthes 6巻1冊。Mittheilungen といふのはこの書物。
- Bodart-Bailey, Beatrice B. M. ボタルト・ベイリー「ヤンベルと徳川綱吉」中央公論社一九九四年。
- Degener, Hermann A.L. : Wer ist's? Unsere Zeitgenossen, Zeitgenossenlexikon, Verlag von H. A. Ludwig Degener, Leipzig 1908 古川英「サビエルの謎」文藝春秋一九九四年
- Hadamitzky, Wolfgang/Rudat-Kochs, Marianne : Japan-Bibliografie Band 1/Teil 1 : 1611 - 1900 Sauer, München 1998
- Hadamitzky, Wolfgang/Rudat-Kochs, Marianne : Japan-Bibliografie Band 1/Teil 2 : 1900 - 1910 Sauer, München 1999
- Hohmann, Joseph : Johannes Justus Rein 1835 - 1918, aus 150 Jahre Rheinische Friedrich-Wilhelms-Universität zu Bonn, 1818 - 1968, Bonner gelehrte Beiträge zur Geschichte der Wissenschaften in Bonn, Mathematik und Naturwissenschaften, Bd. 7, H.

Bouvier, Bonn 1970 一九九一〇四頁。伝記に関してはこの Hohmann の記述をかなり参照した。

洞 富雄『幕末維新の異文化交流』有隣堂一九九五年。

板沢武雄『シーボルト』吉川弘文館、新装版一九八八年。

Kämpfer, Engelbert ケンベル『江戸参府旅行日記』平凡社一九七七年。ケンベルの書物『日本誌』の第五巻だけの訳である。しかし『日本誌』は、ケンベルの意図に反して、また、反日本的な説明を付加した翻訳者シヨイヒツアーや日本を美化しないように言葉を選んだ編集者ドームによるドーム版が下敷きになっている(ポダルトリベイリー二三四頁)。

Knipping, E.: Reisen und Aufnahmen zwischen Osaka, Kioto, Nara und Omnesanjo in Nippon, 1875

Kreiner, Josef モーザフ・クライナー『ケンベルのみた日本』日本放送出版協会一九九六年(クライナー)

Lauer, Wilhelm (Hrsg.): Beiträge zur Geographischen Japanforschung, Vorträge aus Anlaß des 50. Todestages von Johannes Justus Rein (1835–1918), Dunmiller Verlag, Bonn 1969 (没後五〇年)

モンテスキエール (Montesquieu, Charles de Secondat) の『法の精神』(一七四八) 編集井上幸治中央公論社一九七二年

マンデヴィル (John Mandeville) 『東方旅行記』平凡社一九六九

松田毅一/E・ヨリッセン『フロイスの日本覚書』中央公論社一九八三年

Rein, Johann Justus; Der Nakasendo in Japan, Dr. A. Petermann's Mittheilungen, Justus Perthes 1880 (一―三七頁)。この書物の中で、中山道を通じた最初の外国人であるとの記述あり。ケンベルもシュンベリもシーボルトも、通らなかった道であると書いている(二三頁)。昔と違って自由に旅行できるようになったことを喜んでいる。但し、参勤交代がなくなると、中山道も東海道も寂れてきているとの記述もある(四頁)(中山道)

Rein, Johann Justus; Dr. J. Rein's Reise in Nippon 1874, Mittheilungen 21, Bd. 1875 一一四―一二三頁)。(日本紀行)

Rein, Johann Justus; Fuji-No-Yama und seine Besteigung; Mittheilungen 25 Bd. 1879 三六五―三七六頁(富士の山)

Rein, Johann Justus; Japan, nach Reisen und Studien im Auftrage der Königlich Preussischen Regierung Dargestellt. Erster

Band, Natur und Volk des Mikadoreiches, Leipzig Engelmann 1881 (日本)

Rein, Johann Justus; Reis und Mais, Vortrag gehalten am 20. Dezember 1876, Geographisches Institut A VIII Pflanzengeographieに収録。これは, das Verein für Geographie und Statistik in Frankfurt a. Main 1875–78 の報告書に記録されたものである。

シーボルト『フィリップ・フランツ(Seibold, Franz von)『江戸参府紀行』平凡社一九六七年

シュンベリ (Carl Peter Thunberg) 『江戸参府随行記』平凡社一九九四年

Veröffentlichung der Geographischen Vereinigung zu Bonn: Festschrift zur Feier des 70. Geburtstages von Johann Justus Rein, Röhrscheid & Ebbecke, Bonn 1905 (生誕七〇年)。この書物「生誕七〇年記念」は、ボン大学の、地理学教室や弟子の手により、地理教室が発行している。この中には、詳しい伝記があり、伝記の記述には、この書物も大いに参照した。また、他の学者の記念論集も数多く収録されている。

Woelke, A.: A. Woelke's Reisen in Japan, 1876, Mittheilungen 24 Bd. 1878

吉田小五郎『ザヴィエル』吉川弘文館一九五九年